

追悼

服部昌太郎先生逝く

服部先生を偲んで

水 口 優(中央大学教授)

服部昌太郎先生が 80 歳の誕生日を目前に控えた 2009 年 11 月 2 日に亡くなりました。その年の 3 月に奥様（純子様）が亡くなられて半年余り、後を追うようにこの世を去っていきました。

若き服部先生

服部先生は中大土木の 2 期生で、林泰造先生のもとで大学院を修了後、そのまま中大に残ったと聞いています。僕が服部先生を最初に知ったのは 1970 年代の半ばで、研究者としても教育者としても油の乗り切った頃でした。林先生の指導の下で始めた海岸工学の研究はちょうど日本の海岸工学の発展期とも重なって、忙しくも楽しい時代のようなものでした。

その頃の話で一番記憶に残るのは、やはり東北大に移る首藤さんの後釜として僕が 1978 年 4 月に中大に来た時に、「研究室として一緒にやっていたらどうか？」と誘われたことです。おかげで赴任直後から卒業研究生と一緒に研究が始められました。その後もいろいろと便

宜をはかってもらいながら、つかずはなれずの関係が長く続きました。ただしこの件には別の側面があって、服部先生は僕と一緒にやることによって林先生から独立することが出来たのだと言う話も聞きました。

その頃の服部先生の主要な研究テーマは海浜変形でしたが、旧 3 号館（今は無き平屋の実験室）内外の水槽を使ってのブロックの実験、海浜変形の実験とそのデータ整理に院生、卒研究生が夜遅くまで頑張っていました。特に海浜変形の実験に使っていた 3 号館の裏側にあった水槽の造波機はモーターの回転速度で波の周期を、回転板の偏心で振幅をコントロールするという単純なもので、海浜

地形の平衡状態を求めての長時間実験にギューギューと音をたてていました。その音に付き合っている学生と時々見に来る服部先生の姿共々懐かしい記憶です。ちょうどその頃 NERC プロジェクトと呼ばれる沿岸域（砕波帯内外）の水理現象に関する大規模な現地観測が行われました。服部先生と僕も中大の学生と一緒に参加しました。服部先生は海浜変形の計測計画の相談役的な存在でした。写真-1 は次の日の観測の打ち合わせをする壮年時代の服部先生です。（相手は、現在米国の陸軍工兵隊の CERC で活躍するクラウス氏）

共に歩んで

1980 年に理工学部の 5, 6 号館が完成し、続いて 2 号館も改修されて土木工学科の研究室



写真-1 現地観測、宿舎で打ち合わせ中（1979 年）

が一新されました。その時、服部先生とは空き部屋を一つ置いての隣り合わせとなりました。しかも服部先生の研究室は3号館に残ったのに対し、僕の学生研究室は廊下の向こう側ということで、僕の研究室の学生にとっては、服部先生は副担任のような存在でした。おかげで僕も服部先生との行き来が日常的となり、本や知識の借り貸し、学内問題の相談、学会（土木学会海岸工学委員会）関係の打ち合わせなどいろいろな事がありました。

この間、服部先生は「海岸工学」のテキストを書き上げ、コロナ社から出版しています。服部先生が退職した後、海岸工学の講義を担当するようになり、その本をテキストとして使っています。難しいという雰囲気を漂わすことなく原理的な所もきちんと抑え、かつ実用的な所も書き込んである本です。服部先生が、僕が学生の研究室にたむろしている時に限って「これはどういうことだと思っ？」と学問的な意見を求めに来ることが良くありました。僕の時間的な余裕のある時を見はからいながら、20歳近くも年下の僕に素直に意見を求めるという学問に対する態度に、僕は服部先生の配慮深さと学問に対する真摯さを見て感心していました。

そんな服部先生ですが、学内の人間関係については意外と正直に好き嫌いを出す所があ



写真-2 国際会議に参加して Santander の町での夕食（1999年）

りました。好き嫌いの基準は僕の見限りでは、いわゆるしゃばりが苦手ということのようでした。東京の下町に育ったということ、言葉遣いがややべらんめえ調で、そのために生む誤解もあって、なかなか苦勞していました。ということで、服部先生を苦手とする人もいたようです。

一方、学外では土木学会海岸工学委員会の幹事長役をしばらくやっていました。東と西の「偉い先生」方に挟まれて雑用をこなす服部先生の姿が何となく記憶に残っています。その後自分が同じ役をやることなど露ほども考えず、あちらを立てればこちらが立たず的に苦勞している服部先生を冷ややかに見ていた気がします。でもそんな苦勞が報われて、海岸工学委員会始めて私立大出身でしかも私立大学の教員であった服部先生が委員長になりました。1987年のことです。海岸工学委員会の委員長はいわゆる

「あがりポスト」ですが、服部先生はその後も研究に熱心で、国際会議にもよく一緒に参加しました。写真-2は1999年、服部先生が退職する年度にスペインの Santander で開催された Coastal Structure という会議に参加した時のものです。その頃は服部先生も奥様と一緒に来ることも多く、娘を同伴することが多かった僕と Santander の町で一緒に食事をしました。千歳船橋駅の直ぐそばにあった前の家、確か家の庭に柿の木があったような気がします。高井戸の新居、東郷青児の絵がかかっていました、そこでも奥様にも随分世話になりました。快活で、服部先生の気の短さを補って余りある気配りの人でした。男の子ばかり3人ということで、娘を連れ歩く僕が少し羨ましかったこともあったようです。

おわりに

2000年3月に70歳での定年退職を迎えた後も、海岸関係のコンサルタントである(株)エコーの顧問として海岸工学に関係していました。中大に勤めていたころに新潟西海岸や宮崎海岸での海岸侵食問題の検討委員会にも入っていたこともあって、エコーでも漂砂、海浜関係の仕事の相談に乗っていたようです。年に一度開かれる海岸工学講演会にも出てきていました。写真-3は2006年徳島県阿南市で開かれた第53回海岸工学講演会時の恒例の中大関係者の会の時のものです。両翼に写っているのは、僕の前任者である首藤さん夫妻です。



写真-3 退職後の服部先生（2006年）

確かこれが服部先生が海岸工学講演会に出てこられた最後の年でした。

この同窓会報が届く頃は、服

部先生の一周忌近くではないかと思います。この一文（と写真）が、服部先生を偲ぶ助けとなればと思います。

（2010年9月21日記）

服部先生を偲んで～思いつくままに～

川 又 良 一（昭和50年卒）

最初の出会い

もう40年近くも前の話になります。授業を適当にこなしながらやっと専門の教科を受講できるようになった頃、「水理学」の初めての授業が先生との初めての出会いとなりました。

当時、バリバリの助教授であった先生は、初めての授業で教室に入るなり英語で喋り出したのです。私は訳も分からずただ茫然と時間を過ごしたのを覚えています。

なぜ英語で喋るのか？未だに分からないのですが、専門教科を甘く見るなど言う「脅し」だったのかも知れません。まあその程度の解釈しか出来なかったためか、私にとって「水理学」は苦手な科目となってしまっていました。

再 会

そうしているうちに、「水理学」をなんとかクリアし卒業研究を選択することになるので

すが、当然「水」関係の分野は選ばず、迷わず興味があった「土木地質」を選択しました。これで「水」とは縁のないはずであったのですが・・・

しかし、その考えが甘かった事にすぐ気付かされることになりました。土木地質の担当教授は鈴木隆介先生でしたが、鈴木先生と服部先生は「リュウカイ」・「ハッチャン」と呼び合うほどの仲だったのです。

当時、服部先生は、「富士海岸の沿岸漂砂に関する研究」を鈴木先生と共同で行っておられ、そのような事もあって鈴木先生の研究室に居候を決め込んでいた私は、いつの間にか服部先生のお手伝いをする事に

なってしまうのです。

研究

服部研究室には、2 年半ほど技術員としてお世話になることになりました。採用当初に先生は、「ここにいる間に論文の一つくらい書けるようにしてやるよ」と言われ、鈴木先生の研究室で「地形学」に興味を持っていた私に対し、「漂砂と地形変化」のテーマを与えていただきました。その間、素人同然の私は卒研生と一緒に試行錯誤で実験を行っていたのですが、先生としては思うように成果の出ない状況に我慢されていたのではないかと思っています。

そして、2 年目には実験成果を論文にすることが出来ることになりました。でも、初めて書いた私の原稿はもの見事に真っ赤に校正を加えられ、原文の残らないものとなりました。

その後、私はしばらくの間

「海岸」を主とした研究や実務に就くことになりましたが、特にコンサルタント時代には、数々の海岸防災等の業務で常に先生のお世話になり続けることになりました。

奥様のこと

中大在職中から、先生のご自宅にお伺いする機会がたびたびあり、その際に先生の奥様にはとても優しくしていただきました。先生よりも奥様とお話するのが楽しかったように思います。また、後に私の子供が小さな頃に家族で何度かお伺いしましたが、まるで自分の孫でもあるかのように可愛がっていたとき、当時、就学前だった長男などは未だに当時の事を覚えているほどです。先生も家庭の事は奥様に任せていたようで、奥様あつての先生であったことは間違いのないところでしょう。その優しくした奥様も先生より先に逝ってしまわれ、先生もさぞ寂しく思われた

事でしょう、奥さまの後を追うかの如く逝かれました。

最後に

服部先生は、教育・研究には厳しい方でした。でも、誰分け隔てなく接して下さった方だと思います。研究人そして家庭人として、そのお人柄を慕う方々も多くおられ、皆が服部先生がお亡くなりになられた事をとっても残念に感じているでしょう。

私は現在、「水」とはあまり縁のない仕事に携わっておりますが、先生のご指導のもとに様々な経験をさせていただいた事を糧に、小企業ではありませんが経営者としてこの不況を乗り切ろうと頑張っています。最後に、服部先生そして奥様のご冥福をお祈りいたし、駄文ではございますが終わらせていただきます。

(クラウン工業株式会社)

服部先生との思い出

青野 利夫(昭和 55 年卒)

服部先生との出会い

服部先生との付合いは、今から遡ること 31 年前に卒業研究で海岸研究室に所属したときから始まりました。当時、先生が

担当していた水理学の授業は難しく(黒板には全て英語で書かれていて、後でノートを見ても当時の私には意味不明でした)、試験も五割程度しか通らないという厳しさから相当怖い先生な

のだらうと思っていました。しかし、案に相違して、研究室での先生は穏やかで自分達の話す研究希望にも真剣に耳を傾けて頂きました(先生が怒ると本当に怖かったのも事実ですが)。当時の技術員は小松さんで、水理系には他に故林泰造教授(当時)、水口教授が当時専任講師として、実験講師として今井先生がおり、

また、林先生の大学院生として大橋正和さん(現総合政策部教授)がいらっしゃいました。土木教室には藤枝さんがおりました。

砕波の研究

当時の水理実験室には、二次元の造波水路が4本、平面水槽、温排水拡散用の水槽、往復流発生装置、開水路等多くの実験装置が配置されていました。先生は、少しでも時間があると実験室にきて、学生たちの実験にアドバイスをしていたことを思い出します。

私は、そのまま大学院に残り砕波を研究テーマとして、その内部構造を研究するにはどうしたら良いか悩んでいました。あるとき、服部先生から東大で Split 型 Hotfilm を使って砕波帯内の流速を計測しているが君もやってみないかと言われました。そこで、よくわからずに“はい”と応え、計測を始めて色々な問題があったものの、何とか砕波帯内部の流速を計測し、乱れ強度やレイノルズ応力といった乱流諸量を算定し、東大の佐藤先生が主宰していた乱流シンポジウムで初めて成果を報告しました。この時は、先生から論文の書き方、プレゼンの方法論さらに図面の作成方法まで、事細かに指導してもらいました。発表はとても緊張しなるとか喋ったという感じでした。質問も、日野先生(東工大)と鳥羽先生(東北大)から頂きました。服部先生

からは、「ばかやろー、なんだあの発表は」と怒られましたがとても印象に残っています。

その後、大学院、技術員と都合9年間、先生と一緒にあって砕波に関する研究を続けました。その間、先生との共著で22編の論文を書き上げさせてもらい、学位論文を提出することができました。学位論文執筆中に中大から東亜建設工業(株)に入社したため、工事現場(当時パソコンはありませんでした)から手書きのペーパーを郵送して先生に校正してもらい迷惑をかけながら書き上げました。先生から、学位授与式後の懇親会でビールを注いでもらいながら「良く頑張ったな」と言われた時、本当にうれしかったことを思い出します。

先生との思い出

服部先生とは、学部時代を含め東亜建設工業(株)に行くま

での9年間、本当に濃い時間を過ごせたと思います。あの当時は、とにかく怒られました。研究に対する姿勢、日常生活からひよっとしたら呼吸方法まで怒られたかも知れません。怒られて実験室へ戻るたびに、隣の水口先生の研究室の和やかな雰囲気うらやましかったです(実態は多少違ったみたいですが)。あるとき、先生から「俺は東京出身なのでがんがん言うタイプだしお前は特に言いやすい。いちいち受け止めずにあの親父がなんか言っている程度に感じれば良いんだ。」と言われて、それはないよなと思いつつも、先生の気配りがうれしかったことを思い出します。

私は、先生にとって不肖の弟子でしたが、この9年間で得られた様々な知識が今の私を支えていると良いと思います。

(東亜建設工業株式会社)



服部先生定年記念祝賀会(ありがとう服部昌太郎先生)にて
中央が服部先生と奥様 針貝総一氏(1975年卒)提供